

『こころ』新しい殉死

Junko Higasa 2015.7.11

夏目漱石は『こころ』最終章で、先生の言葉の中に自身の決意を表明する。

『私は殉死という言葉を殆んど忘れていました。平生使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談さい しょうだんを聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向ってもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。私の答も無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです』

武家時代の、主君に準ずる、あるいは時代交代のための「殉死」は、有能な人間減少に行き当たり、禁止されて久しい。その「古い不要な言葉」が記憶の底で消滅しかけていた時、明治の終焉と共に乃木希典殉死が起った。そのとき漱石の心に「殉死」という言葉が新しい意義を持って甦った。乃木希典の「自他統一」という過去式殉死に対する「自己統一」という現代的殉死である。それは国家に貢献する人間育成のための「明治の(学問による向上)精神」の社会性を踏まえた自己統一である。

学問によって自分を成長させ人間性を高め、世の中に役立つ人間として「行き着くところまで行って斃れる」と心に誓った漱石は、「向上」の為に自分を律した「明治(天皇)の精神」を顧みて、自身の「壮絶」な美の一点に散る覚悟を新たにしたと思われる。